
もしもあの時

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしもあの時

【Nコード】

N6251Y

【作者名】

みかん

【あらすじ】

何に關してもやる気なし。そんな小林 ハルトはある昼休み、屋上でクラスで孤立しているクラスメイトと出会う。
それがきっかけで一度諦めた夢をもう一度かなえたいと思う。

ぼくという人物（前書き）

レオの友人みかんが書いたものです。

もしも、あの時ぼくが屋上に行こうとしなかったら今は何をしていたんだろうか。

そう思うと「運命」とかいう言葉はあながち身近なものなんだろうと今、身にしみて思う。

ぼくという人物

「あれ・・・？」

何故かぼくはすんだ美しい泉のほとりにいた。

（うそ！？ぼくの住んでる国って日本だよね？なんでこんなところにいるの？）

「いったいここはどこ・・・？」

ぼくが辺りをみまわしていると泉がきらきらと輝きだした。

まぶしい中目を細めながら泉を見ると、中から人のような影が現れた。影はしだいに女性の姿になった。すきとおるような白い肌。流れる絹のような金髪。涼しげな目元。

（う、うわぁ・・・。きれいな人だ。）

ぼくの心臓が急に鳴り始めた。まあ、それは思春期なので・・・ハイ。

ぼくの視線に気づいた女性はこちらを向いてうつとりするほど美しい笑みを浮かべた。

ぼくの心臓はよりいっそうはやく鳴る。

「私は女神。あなたの願いは・・・夢はなんですか？」

「え・・・？」

「私がかねてあげましょう。」

まるで童話のようなシチュエーションにぼくは昔あきらめた願い・・・夢をいうことにした。

「ぼくは・・・」

女神はじつとぼくをみつめる。

「ぼくは『ピーをしたピーになるピーっ』です・・・っえ？」

（今なんか良くない擬音が混ざったような・・・）

「いや・・・あのね、べつにぼくは『ピー』をしたいわけじゃ・・・」

「分かりました。」

（良かった……。分かってくれたんだ。）

「『チヨメチヨメをするちよめちよめ』……ですね？」

「いえ、全然違います!!」

（伝わってない……。ようし!こうなったら大きな声で……）

「ぼくの夢は……!!!!」

「起きろ!この馬鹿兄貴!!」

（え……。?）

どこか聞き覚えのある声とともに頭に鈍い痛みが伝わった。

「いつてえ……。!」

痛みの衝撃で目を開けるとそこは光り輝く泉のほとりではなく、ゲームや雑誌が散らばるぼくの部屋で、

目の前にいるのはあの美しい女神ではなく、ぼくの妹。小林 秋奈だった。

「もう!早くしないと学校に遅れるよ?」

台詞だけ聞くとかわいいどこにでもいるような妹キャラだが、持っているものがテニスラケットという残念な状況。

「お前なあ……。いくらなんでもラケットはひどいdar! たっくひとがせっかく……」

良い夢見てたのに、と続けようとしたがふと夢のことを思い出し口をつむんだ。

（秋奈ならなんていうんだろう……。）

「なあ……。おまえの夢って何?」

「な……。なによ、急に」

「いいから」

妹はいきなりの質問に戸惑いながらも答えた。

「小さい子に好かれる保育士さん」

子供好きの秋奈らしい夢だ。なら……。

「じゃあさ、もしもその願いかなえてあげるって神様がいったらどうする」

「ねえ……。本当にどうしたの？」

「いいから」

妹は少し考えたように首をひねってから、落ち着いた声で言った。

「断る」

「はい……。？」

迷うことなく女神に言ったぼくとは違う意見だった。

（それでも面倒くさがりのぼくの妹か？）

「何で？」

理由を聞くと秋奈は、

「だって、自分の力でかなえないと意味無いじゃん」
と、まっすぐ答える。

ぼくはだんだん自分が情けなくなり、大きいため息をついた。

（妹のほうがスゲエや……。）

ぼくはベットから降りて学校へ行く準備を始めた。

君という人物（前書き）

あの時聞いた歌 不思議とまだ覚えている
あの日ぼくが屋上で聞いた歌・・・

君という人物

「ちいーっす！ハルト、宿題写させてえ」

「・・・」

まだあまり人がいない教室にはいったぼくを待ち構えていたのは
ぼくの友人、橋本 たけるだった。

ぼくは一度大きいため息をつき、笑顔で手を広げているたけるを
ジロリと見た。

「お前なあ・・・ ぼくばかりに借りようとするなよな。

っーか、自分でしろ！」

「まあーまあー、そうカタくなるなよハルちゃん」

強引にかたを組んでくるたけるを「気持ち悪い呼び方をするな！」よ
突き放し、席に着く。

カバンを開けながら「教科は？」と聞くとシャーペンとノートを持
って

ぼくの席の隣に座ったたけるは「英語。今日あるんだ」と

答えた。

「まあ、こんな奴だけど根は良い奴だし、なんか憎めないんだよな）
必死にノートに英訳を写すたけるを見てまた小さくため息をついた。

そのとき――

ガラガラッ

教室の扉が勢いよく開けられた。

「あっ・・・」

ぼくは教室の入り口を見てハッとした。

僕が近寄りがたいと思っている女子

さくいぎ

まなみ

桜木 愛美だった。

彼女はスタスタと窓際の自分の席に座った。

桜木愛美は半年前ー高校１年生になったばかりの時にこの学校にき
た。

別に苦手だと感じているのはぼくだけではなく、むしろクラスの全員が

そう感じているらしい。

問題は性格。特に誰とも関わろうとせず、いつも1人でボーっとしたり、ノートに何か必死に書いていたりしている所がブキミらしい。

さらに背中にかかるぐらいの長さの茶髪に白い肌。

長い手足に整っているがあまり愛想の良くない顔立ち。

誰もが少しは「きれい」と思うであろう彼女の容姿はクラスで孤立するワケに入っていた。

（あ・・・）

僕がついジッよ見つめていたせいか、彼女はぼくのほうをジロリと見た。

ぼくはとつさに視線をノートに移す。

「こえーよなあ、桜木って」

たけるが僕に耳打ちをする。さらに

「なあ、知ってるか？また桜木が他校の奴らと夜つるんでたらしいぜ？

ほぼ毎日。よくやるよなあ・・・。」

と、どこで手に入れたのか分からない情報をぼくに言った。ぼくは

「知らねえ・・・。」と言ってまたチラリと彼女をみた。

（多分こういう噂がまわっているから桜木って馴染めないんじゃないか？）

そんな事を思いながら。

「ふあああ・・・zzz」

（眠い・・・ハンパなく眠い・・・）

今日は絶好の秋晴れで風が気持ちいい。その上、昼食もって満腹だ。

（よし、屋上で寝よう・・・！）

5限目に遅れるのを覚悟の上でぼくは昼寝をしようと決めた。
ぼくが眠い頭でボーっと屋上に行く階段を上っていると

「ああ、目の前に映る――」

不意に何か耳に流れる。

（これは・・・歌？）

とてもきれいで思わずやかな声。周りがうるさいせいか本当に、
本当にわずかにしか聞こえない声。

（気のせい・・・？でも確かに聞こえる・・・）

ぼくはまるでその声に引き寄せられるかのように階段を上がった。
階段を上げればあがるほど歌声が大きくなる事から、歌っている
人物は屋上にいると確信した。

夢中で階段を上がっているとついに屋上入る扉の前についた。

声は・・・女子。しかも、どこかで聞いた事がある気もする。

（いったい誰が・・・！）

ぼくは思い切ってドアを開けた。そこには、秋風になびく茶色く長
い髪。

ぼくは息を呑んだ。

（もしかして・・・！）

そう。そこはぼくのクラスメイト

桜木愛美がいた。

ぼくと君（前書き）

ある昼休み、昼寝をしようと屋上に向かったぼくは
とてもキレイな、やさしい歌を聞いてしまった。
なんとそれを歌っていたのは・・・

ぼくと君

僕は屋上で歌っているクラスメイトをぼうぜんと見つめていた。耳には彼女のすずやかな歌声が流れる。

彼女はぼくに気付いてないのかずつとぼくに背をむけたまま手すりにもたれかかって歌っていた。

「あの・・・さつ桜木！」

「!？」

ピタリと歌声が止んだ。彼女はゆっくり顔だけ振り返る。

彼女の澄んだ目がぼくを見つめる。

（あつ・・・。なっ何か話さないと・・・。えっと・・・。）

ぼくはしどろもどろ彼女に話しかけた。

「あつ・・・あの、何をし・・・。」

「珍しいわね？」

「え？」

彼女はぼくの言葉をさえぎって体ごとぼくに向けた。

「普段誰も立ち寄らないのに。本当にめずらしい。あなた何をしに？」

（ぼくが聞こうとしたことまるつきり返された・・・）

「えっと・・・昼寝です・・・。」

「昼寝？」

「ハッハイ・・・。」

ぼくはなぜか恥ずかしくなって俯いた、そして、思い切ってぼくは彼女に聞いた。

「きつ・・・君は何をしているの？」

「歌ってた」

きっぱり返された。

（それは、わかってる。ぼくが聞きたいのはどうしてかなのに・・・）

自分の情けなさのため息をつく。

「・・・」

「・・・」

二人の間に気まずい空気が流れる。グラウンドの方からは生徒がサッカーしたりしている声が聞こえる。

（もう昼寝を諦めて教室に帰ろう・・・）

そう思い、ぼくが屋上を出ようと背を向けた時、彼女が駆け寄ってぼくの腕を掴んだ。

「ええ?!」

がつしりつと掴んでいて振り払えない。

（ちょ・・・えっ!? な、何?!）

「あなた私の歌聞いていたでしょう?」

（やっぱり気付いてたのかな・・・?）

「どうだった?」

「え?」

突然の質問に驚く。頭の中が一瞬真っ白になった。

「下手だった? ダサかった?」

彼女はズラズラと言葉を並べる。

（こっかわ・・・）

「別に・・・ヘタじゃなかったよ? むしろ上手だった・・・」

ぼくは、彼女の鋭い目に怖気付きながら答えた。

彼女は「本当に?」と聞き返す。

「本当にキレイな声だったよ! もういい?!」

ぼくはやケになって無理矢理腕を振り払った。

彼女は少し悲しそうな顔になって「ごめん・・・」と小さく呟いた。見慣れない彼女の常用にチクリと胸が痛んだ。

（ちよっときつかったかな・・・）

謝ろつと口を開いた直後、昼休み終了のチャイムが鳴った。

「・・・」

「あつ・・・！」

ぼくをすり抜けて彼女は足早に階段を駆け下りていった。

チャイムが鳴り終わってもぼくは1人ポツンと立ち尽くしていた。
まだ耳に残る彼女の歌を思い出しながら。

君の歌

「ハア・・・」

今日で何度目のため息だろう。昼休みでのあの出来事を思い出しながら

ぼくは夕飯のカレーを作っていた。

小林家は両親ともども1日中仕事なので、基本家事は当番性。

朝食はぼくが朝起きるのが遅いぼくの代わりに秋奈が。

夕飯は部活で帰りが遅い秋奈の代わりにぼくが。

これが小林家兄弟のルール。

（何か今日は疲れたなあ・・・。）

ニンジンやジャガイモ、玉ねぎを一口サイズに切ってポウルに入れながら

また小さくため息をついた。

（にしても、まさか桜木があんなに歌が上手だったとは・・・）

彼女の歌声を思いだしながら野菜を炒める。

（ていうかあの質問責めは正直怖かったなあ・・・。）

普段あまりしゃべらない人がしゃべるところも怖いのか？

と彼女にされた質問責めを思い出しながら肉も炒めた。十分に火が通ったらなべに水を入れる。

（でもやっぱり一番こたえたのは・・・。）

『ごめん・・・』

つい強く腕を振り払った僕に呟いた言葉。

少し悲しそうな表情を思い出すと心に何かモヤモヤとした黒いかたまりが

でてくる。

（女子の・・・しかも、いつも無表情の人の悲しそうな顔ってなんかダメージくるんだよなあ・・・）

とカレーのルーをなべに入れながら考える。

なべにふたをしてからばくは心の中の黒いモヤモヤを吐き出そうと大きくため息をついた。

「ちよつと！そんな辛気臭いため息つきながらご飯作るのやめてよ！」

「！」

声のするほうを見るとまだ制服姿の秋奈が立っていた。

「あつ秋奈？いつ帰ったんだよ！？」

「さつき。もうおなかペッコペコ・・・」

秋奈はそういうとソファーにどさつと寝転ぶとテレビをつけた。毎週この時間帯にやっている音楽番組だ。

「テニスの練習そんなにハードなのか？」

「うん。もうすぐ試合が近いから・・・」

秋奈がテレビを見ながら答える。

「そつか・・・」

ぼくは短く答えるとなべをかき混ぜた。

『では、次は最近話題の高城リタさん！歌ってくれる曲はドラマの主題歌』

になった「目の前の景色」よ新曲、「秋空」です』
ぼくは聞いた事のない人物の名前に首をひねった。

「誰？」

「知らないの？最近売れてる歌手だよ。この人の歌、歌詞がいいんだよねえ。」

例えば今から歌う『目の前の景色』とか！」

と秋奈が教えてくれたそのすぐ後に曲が始まった。

ぼくはサラにカレーを注ぎながら聞いていた。けれど歌手が歌った瞬間、ぼくは驚いてカレーを零しそうになった。

「ああ、目の前に映る——」

「この歌・・・！」

「？」

秋奈が少し振り返るが僕が何も言わないのを見てまた視線をテレビ

に向けた。

ぼくは今日昼休み屋上で聞いた歌を思い出して比べる。

歌詞もテンポも同じ。やっぱり――

（桜木が今日歌ってうた曲だっ・・・?!桜木もしかしてこの歌手が好きなのかな?）

ぼくはカレーをテーブルに運びながら「よし」と小さく呟いた。

（明日、「昨日はキツくあたってごめん」って言うついでに聞いてみよう）

と決意して。

君の夢（前書き）

夢・・・将来実現したいと思っている理想や希望の事

君の夢

ぼくは屋上へと続く階段を上っていた。

できる事ならば教室で全部おわらせたかったが、どうしてもクラスメイトの視線が気になっていえなかった。

（多分今日も桜木は屋上にいるはず・・・！）

そう願いながらひたすら階段を上る。

「桜木！」

屋上についたぼくは勢いよく扉を開けて彼女の名前を呼んだ。しかしそこには誰もいず、ただ冷たい風が吹いていた。

（アレ・・・？もしかしていない・・・？）

そう尾もい引き返そうとした瞬間後ろから

「何？」

と無愛想な返事が返ってきた。

（！！！？）

驚いてひっくり返りそうになったが一度大きく深呼吸して体制を整える。そして何事もなかったように冷静さをよそおい

「丁度良かった、桜木に用事があったから」

振り返っていった。そこにはちゃんとぼくのクラスメイトの桜木が居た。

「私も丁度小林に用があったの」

彼女はぼくの前に立つ。ぼくは不安になってきた。

（文句とかかな・・・？もしか走なら・・・）

先手必勝。とも言っただろうし先に謝ろう。

ぼくはぎゅっとこぶしを握って

「昨日はきつく言ってごめん、悪気はなかったんだ」といった。

「どうしてあなたが謝るの？」

「え?!」

ぼくは瞬きをしながら彼女を見る。彼女は真顔。

（ぼくなにかまちがった? いやでも・・・）

「何でって、昨日ぼくが失礼な事したから・・・」

「失礼なのは私でしょ? だっていきなりクラスメイトの腕掴んでしつこく質問するなんて。普通はコツチが謝るほう。」

「コツチ」と言いながら桜木は自分のほうを指す。そして、

「私もごめんなさい。怖かったでしょ?」

と謝ってくれた。

「怖くなかったよ、少ししか・・・」

僕の事場に彼女は苦笑して屋上に入っていた。ぼくも続く。桜木がぼくのほうを振り返って

「まだ用事があったの?」

と聞く。ぼくは首を横に振って、頭をかきながら言った。

「特に重要じゃないんだけど、いくつか質問したくて・・・」

彼女は座ってノートを広げて必死に何かを書きながら

「いいよ」

と短く答えた。

のくは昨日聞いたこととした事を質問した。

「桜木って高城リタスキなの?」

「ウン、ていうか、尊敬してる。ああいう歌手になりたいって・・・」

「

なりたイッ・・・てことは将来の夢は歌手?」

「うん・・・。皆が元氣になれる歌を届ける歌手」

桜木が顔を上げた。ぼくは純粹に凄いと思った。

（こんな風に誰かに自分の夢をはっきり言えるってスゲー・・・）

ぼくは笑顔で

「きつと、なれるよ」

といった。嘘はない、本心でそう思う。

桜木はまたノートに視線を写した。

「ありが・・・クシュンッ」

桜木が寒そうに腕をさする。今日は昨日と違い少し肌寒い。

桜木はノートを閉じて教室に戻ろうとした。ぼくも戻ろうと立ち上がる。

「とこで・・・」

屋上を出たところで桜木は聞いた

「あなたの夢は？」

「え？・・・?!」

ぼくはドキリとした。

（ぼくの夢は・・・）

ぐっと右手を握りしめて目一度小さく息を吐いた。それから努めて
明るい声で

「サラリーマンかな？それなりに良い会社の」

「サラリーマン？」

「そう！サラリーマン、ごめんね、かつこいい夢じゃなくて」

桜木は顔を背けて

「別に・・・あなたが本当にしたことなら何も言わないけど」

（桜木ってさらっと人の心にグサツと突き刺さる事言うよなあ・・・）

と小さくため息をつきながら思った。

その後ぼくは『好きな菜食べ物』『好きな花』『色』について質問した。

なぜか彼女の事が知りたい思った。

じぶんでも、どうしてかわからないけど・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6251y/>

もしもあの時

2011年11月29日20時45分発行